

ホトトギス

昭和二十三年三月二十八日発行
平成二十二年七月一日発行
（第百十三巻第七号）

ホトトギス

七月号



俳句随想 〔三百三十七〕

汀子

弘子さんは私が平成十二年にNHKから出した『俳句十二か月』の第三章「自然と人間」の文章を事ある毎に繰返し誉め、自分もいつかあのような文章が書きたいと言われるようになった。それと共に自分には国文学的な素養や歴史的或いは民族学的な素養が乏しいと洩らされることがあった。

最近の弘子さんはよく他流試合に出掛けるようであった。恐らく自分の句に欠けていると感じる或るものを、刺激的な場に身を置いて自分に加えようと努力していたのであろう。私は痛ましくさえ思いながら、季題を掘り下げて研究することこそが、貴女の感じている不安やコンプレックスを解消してくれる筈ですよと心の中で眩いていた。しかしそれを口に出すことはなかった。

心身の余りの励みが弘子さんの生命を奪った。「俳句を作るものは他の言に惑わされ、俳句を他の文芸以下にあるものと考えるのは突止である。自分の弱い心をどうすることも出来ないでややもすると他の文芸の下に跪こうとするのは唾棄すべきである」という虚子の言葉を生前に伝えてあげることが出来なかったことを弘子さんの師として申し訳なく思う。同時に「貴女の俳句は、貴女が斬り結ぼうとした他派の誰にも負けていなかった」と言っておきたい。

旬日記 汀子

平成二十一年七月一日 ロイヤル俳優

こののちのスケジュール混む月見草
露涼し集へば若き日に戻る
炎天を支へきれずに降らすもの
七夕の飾りはじまるロビーかな
月見草三瓶の旅を近づけて
七月一日 春菜会同窓会

会一つ終へ梅雨晴の古都へ旅
皆歳を重ねぬし会とて涼し
梅雨じめり部屋にはなくて庭にあり
百年のホテルの歴史露涼し
結局は十一人の会涼し
若き日に戻る涼しき仲間かな
七月二日 春菜会

朝の雨旅の涼しさいざなへる
一泊といふ梅雨の旅降られても
皆老を諾ひしより旅涼し
邂逅の梅雨の出逢ひとなりし古都
七月四日 芦屋ホトギス会

百人の汗引いてゆく大広間
噴水に水の自由を残し広がり
はかりごと内緒にならぬ夏の月
古き家を住みつぐ家族夏館
七月五日 関西野分会

落日文拾へばことと音立てし
山道の風の素通り落し文
七月五日 下萌旬会
水無月の旅北国となりしこと
流れある庭に蛍の夜を思ふ
七月九日 清交社

冷房に居過ぎたる身を天日に

足許の石に躓き道をしへ
日草咲き雑事てぬし旅歸り
仕上げた機上片付きゆけるかな
冷房に机上片付きゆけるかな
好き嫌ひ行者道とて迷はずに
道をしへ行者道とて迷はずに
七月十日 工業倶楽部

旅涼し北へ向つてをりしとき
水打ちて打ちたざる如く迎ふ客
七月十一日 北海道ホトギス同人会
名園の水の涼しさ俯瞰して
東京の暑さを脱ぎ着陸す
万緑を一直線に抜けて街
梅雨のなき蝦夷とて雲の重き日よ
七月十一日 北海道ホトギス俳句大会前日旬会

万緑にとらはれしより蝦夷の旅
札幌の涼しさは今降り立ちぬ
耐へて来し日々を語らず蝦夷の夏
七月十二日 北海道ホトギス俳句大会
青空を取り戻したる蝦夷の夏
露涼し開門を待つ一時間
惠庭岳見えぬ歩くクローパー
七月十四日 大阪倶楽部

茂より洩れて来る声五六人
着席日も零さぬ茂とはなりぬ
木席をして汗拭いてよりのこと
行先に立ちかはじめたる雲の峰
汗忘れをりし二日の蝦夷の旅
七月十四日 綿業倶楽部

車降り会場までの暑さかな
思ひ出す人羅を着る度に
七月十五日 夏潮旬会
冷房を出て風と合ふ人と逢ふ
今わが家涼しき音と聞く工事
七月十八日 石見ホトギス俳句大会前日旬会

迷ひしやただ万緑を抜ける道

伽石も吾を待ちくれし涼しさよ
三瓶の夜星に渡して露涼し
七月十九日 石見ホトギス俳句大会
真夜星を見せ閉ざせし夏の雲
夏山に歸路の体力残し置く
七月二十日 祝浅井青陽子様百寿
慕はるる百寿涼しく嬰鏢と
よべ雷雨清めし龍野祝ぎ心
白南風のあと一吹の欲しき朝
七月二十一日 有恒倶楽部

稜線にはじまつてある雲の峰
草原を歩き来し身に夏炬あり
白南風のときに雨呼ぶ暗さは
水無月の日食の晴疑はず
雷雲を抜ける大揺れ着陸す
七月二十一日 無名会

形見なるほ、けし団扇手に取りて
近づきて遠ざかる滝音のあり
方向の確かならざる滝音に
滝風をまともに受けて降り立ちぬ
古団扇使ふことなきまま置かれ
日食の明日へ白南風吹くべかり
七月二十一日 祝細川泰様御結婚

人生の踏み出す一歩花野道
七月二十三日 きららぎ会
持ち直す犬の健康夜の秋
野牡丹の花と知らずに見てをりし
野牡丹の明日へとどのふ花の数
はじまりも解消となる夜の秋
寝不足も解消となる夜の秋
七月二十四日 時雨旬会

見慣れたる窓改る初景色
霧消えて富士の斑雪の現はるる
戦の世時代祭に重ね見る
七月二十六日 野分会
快晴は昨日のことよ春の霜

快晴は昨日のことよ春の霜

廣太郎句帳

廣太郎

平成二十一年七月二日 蕉心会

夏館とは風流れ水流れ
髪洗ふ蕉心会で会へるから
冷房の効いたところでない嫌
この雨も梅雨明誘ふものとして
雨止むを汗引くを待つベンチかな
雨男振りを發揮の半夏生
芳之介さんの夏服お洒落かな
山梔子の花の香忌日近付けて

七月九日 土筆会

夜光虫大和眠れる辺りより
水泳や母と競ひし頃のこと
綿の花視野はみ出してをりにけり
七月十二日 北海道ホトギス俳句大会
雲海に地球の青さ加はりぬ
東京の暑さは飛機を降りるまで
雲海に黒々と影落す飛機
純白といふ雲海の気品かな

大夏野地球の丸さ見失ふ
牧涼し木の香草の香大地の香

七月十三日 朝日カルチャー若草句会

雲の峰北の大地といふ高さ
黒といふ夏服で彼待つ彼女
風神の加勢してゐる雲の峰
白服を吐き出す女性専用車
雲海に突つ込んで行く飛機の旅

七月十六日 登高会

虹立ちて虚子と愛子はこの辺り
噴水に集まりたがる水の精
日本一美味き焼き鳥屋のビール
物語生れて虹の消えにけり
噴水の表と裏で待つ二人

七月十七日 浜田吟行会

梅雨霧に弄ばれてゐる端山
梅雨霧を纏ふより山陰となる
風蘭の風と存問する高さ
鶯の笛梅雨雲を押し上げてをり
梅雨霧をバス押し退けておし
この雨にこの風に蚊は退散か
雨上るより姥百合の距離となる
七月十八日 石見ホトギス俳句大会
沙羅の花君はすつかり石見通
梅雨晴間阪神も勝つ時は勝つ

月見草昨夜の星屑纏ひ出づ
合歓の花見下ろす丈でありにけり

七月二十日 虚子記念文学館投句

人寄せて蚊を寄せて館華やげり
七月二十日 地球ボランティア協会投句

ボランティア熱く語れる目の涼し
七月二十一日 草木瓜会

真つ先に箱釣に駆け出したる子
青葡萄甲斐の山並染め上げて
箱釣やおつちやん一匹負けてんか
青葡萄結界として山険し
山気込め靈気を秘めて青葡萄
七月二十一日 目黒学園句会

灯涼し昨日も今日も午前様
丸かじり部活帰りの子のトマト
日蝕を見るてふ端居心かな
トマト切るより主婦の朝始まり
夕端居たましひ抜けてゆきにけり
七月二十八日 若水句会

先頭はお花鳥といふ無線
じんべ着て日本一の目利とや
お花鳥君を忘れる為に来し
冷奴大吟醸を友として
七月三十一日 カトリック新聞速者吟
桐一葉聖母子像の懐に

雑詠

廣太郎 選

あまりにも哀しき訣れ梅二月 西宮 田中祥子
 呼びかける言葉むなしく冴返る 同
 白梅や心の整理つかぬまま 同
 かなしみの睦月の雨となる別れ 京都 安原 葉
 面影を偲ぶ余寒の灯を低く 同
 君偲びつつ雛の間に一人かな 同
 春立ちぬ円くやさしき母の肩 神戸 山田佳乃
 山川の懐深し春の雨 同
 早春の虹を探しに行きしまま 同
 追悼号成りし梅苑披く日に たつの 浅井青陽子
 踏切りを二つ越えゆく寒見舞 同
 存分に大枝のばし大枯木 同
 鯉の背の大きく春へ向き変へる 熊本 岩岡中正
 健脚が一本の野の梅に逢ふ 同
 水仙に明治は高く香りけり 同
 恋いくつ整理マドンナ卒業す 西宮 海輪久子
 父の夢あらかた毀し卒業す 同
 以下同文以下同文と卒業す 同

つつまれてゐて春風でありにけり 龍ヶ崎 今橋眞理子
 かけてゆく後ろ姿も恋の猫 同
 一本のミモザ明りの中に住む 同
 風向きの梅の香りを運ぶとき 東京 今井千鶴子
 たんぽぽを残してゆきし車椅子 同
 これからを托す汝等春の宵 同
 凭れゐる一樹分なる囀に 香川 湯川 雅
 存在は雨粒の中なる木の芽 同
 下萌の溺れてしまひさうな雨 同
 御破算で願ひますとて寒雀 八尾 岩垣子鹿
 振り向けば猪蹤いてくるのどけさよ 同
 水底に日溜のある余寒かな 同
 一月や年尾を偲び地震語り 東京 大久保白村
 風花を掬ひ巻きこむ水車かな 同
 三島までともに帰るか雪女郎 同
 風筋をよりどに鳥の帰りゆく 八尾 山下美典
 堰音に雪解の加勢してをりぬ 同
 信心の重さ修二会の火の重さ 同
 寒明けしことにも老のかしづける 福山 竹下陶子
 煩惱の百鬼飛び交ふ豆を撒く 同
 芝火いま眼中に燃え胸中に 同
 瀬戸の春とは匂ふもの潤むもの 神戸 涌羅由美
 彼の人のまなざしに似てお雛さま 同
 雛の間幼き吾に会へさうな 同

雑詠句評（六月号より）

昭代・しげ人・純也
雅　・暮　潮・くに彦
一歩・仁　義・比奈夫
佳　乃・廣太郎

寒卵割り真つ新な朝であり　神戸　山田弘子

「真つ新な朝」とはどんな朝なのであろうか、寒気の清々しさか、又最近御自宅を改築されたとお聞きするが、作者を思う限りその様な単純な意味ではないように思われるのである。

黄味のもりもりと盛り上った寒卵の新鮮さ、それを見た一瞬の感性の閃きであり、作者自身に生気の甦る思いが有ったのではなからうか。今迄何か決断が下せず逡巡していた一事に、瞬間の決心と新鮮な意欲が湧き上ったのであろう。真つ新な朝とはその出発点と思うのは考え過ぎであろうか、そう思う時新鮮な寒卵の印象が力強く心に残る。惜しむらくは、去る二月七日作者は突然に、全く突然にこの世を去られた。本意はお聞きする由もないが、此の後もう御句を拝する事も出来ないと思うと哀惜の念が込み上げてくる。（昭代）

山田弘子様自身がホトトギスへ投句なさった生前最後の句である。今月も又筆者の勝手な解釈をお許し頂きたいが、実は筆者をはじめ編集者、その他一部しか知らない事がある。それは、この

出された投句用紙の日付なのである。弘子様は、投句用紙を出される時は必ず裏面の住所氏名等必要事項はきっちりお書きになっておられた。そして今回出された投句の日付は平成二十二年一月二十五日であった。切手に押された消印も同じ日付であり、この日に投函されたのは間違いないだろう。そしてこれも筆者の勝手な推測であるが、実はこの日に先立つ一月二十二日に、弘子様はある総合誌の新年会に出席され、筆者とも親しく懇談されている。そして次の二十三日には社団法人日本伝統俳句協会の協会賞選考会の選考委員として会に参加しておられる。翌二十四日にはNHK全国俳句大会に行かれ、余談ではあるがこでも筆者は、有り得ない偶然のような場所で弘子様とお会いし、結局これが最後の出会いとなってしまう。実はこの二十三日と二十四日の両日の出来事がこの句を解釈するヒントになるのではないだろうか、これも筆者は勝手に考えている。二十三日の選考会で協会賞に輝いた方、当時御本人はもちろん選考委員のみにしか知り得ない事であり、我々も協会の機関誌「花鳥諷詠」三月号で知った事ではあるが、それは愛娘山田佳乃様であった。そして翌二十四日の会場であるNHKホールの舞台には、選者特選をとられた佳乃様の輝く姿があつたのだ。その後神戸に帰られて、ホトトギスへの御投句に選ばれたこの句、前掲藤浦昭代様がおっしゃるように「瞬間の決心と新鮮な意欲」である。筆者の勝手な解釈ばかりであるが、愛娘の輝く姿を見て、いよいよ後継への道を歩ませる決心をされたのではないだろうか。あくまでも結果論であり、これ以上深読みするのは大罪かも知れないが、愛娘にこれらを託す事の出来る安堵感、何よりも愛娘に対するメッセージではないだろうか。時空を超えた「極楽の文学」を遺された。（廣太郎）

天地有情

子選

看取り果つ悴み共の帰路となる
 凍星に筆折るまじと誓ひつつ
 睦月尽花のやうなる人逝きて
 幻の富士を見しより日は永き
 きらきらときらきらと若水の縞羅
 初鴉 孤 高 飼 犬 孤 独 かな
 春雨のあの世へ出句忘れさう
 旦夕の命なれども春惜む
 虹の石こたびは鏡餅浮かべ
 雪の上ならふそく立てる忌日あり
 還らざる人よ薄墨桜咲く
 飾られし雛にも君の偲ぶる
 春の空より霹靂の訃報かな
 陶然と悲しき知らせ暮かぬる
 島 畑 の 廢 帝 陵 へ 初 詣
 なかんづく小諸百句の水柱の句
 惜しまれて揖保の川原の遠霞
 そのかみの紀元節をも語り合ひ

石川 辻口八重子
 同
 東京 今井千鶴子
 同
 同 稲畑廣太郎
 豊中 瀧 青佳
 同
 神戸 後藤比奈夫
 同
 京都 安原 葉
 同
 榎原 稲岡 長
 同
 徳島 上崎暮潮
 同
 たつの 浅井青陽子
 同

露寒の昨日逢ひしに今日は亡く
 極彩の翅をいのちの蝶凍てて
 白檀の小さき雛の香を飾る
 存在は次郎左エ門雛の鼻
 しのこせしことの山づみ水ぬるむ
 花ミモザ仰ぎ今年も恙なく
 妻の亡き寂しき自由寝正月
 老ひとりおろおろとして寒に入る
 人の世をふと濡らしゆき春時雨
 ややありてより初雷と呟ける
 雪割草咲くころの吾健康に
 初花といふは古典を秘めてゐし
 句帖まだ春を詠はぬ余白かな
 氷点下なれど輝き初めし春
 老境と言はむ梅愛づ心にも
 僅かながら看取りの疲れ寒の明け
 行く人も城も小さく冴返る
 盆梅に日の廻り来る廊下かな

尼崎 中村芳子
 同
 神戸 長山あや
 同
 吹田 宮崎 正
 同
 寝屋川 山田柳水子
 同
 箕面 井上浩一郎
 同
 福山 竹下陶子
 同
 神戸 山田佳乃
 同
 仙台 赤川誓城
 同
 八尾 岩垣子鹿
 同

天地有情句評

汀子

雪の上ならふそく立てる忌日あり 神戸 後藤比奈夫

阪神淡路大震災から十五年を迎える哀しみ。

看取り果つ悴み共の帰路となる 石川 辻口八重子

還らざる人よ薄墨桜咲く 京都 安原 葉

共に元氣な帰路となつて欲しかった作者の慟哭。

思い出の中で折につけて悼む人。

睦月尽花のやうなる人逝きて 東京 今井千鶴子

春の空より霹靂の訃報かな 榎原 稲岡 長

山田弘子さんを悼むひとりとして。

春の空が落とす雷鳴とも思う驚きの訃報。

初鴉孤高飼犬孤独かな 東京 稲畑廣太郎

なかんづく小諸百句の氷柱の句 徳島 上崎暮潮

鴉と飼い犬の迎える新年。

虚子が小諸で耐えた寒さを氷柱の句で知った作者。

旦夕の命なれども春惜む 豊中 瀧 青佳

そのかみの紀元節をも語り合ひ たつの 浅井青陽子

はかない命と知っていても季節の推移に心置き期待を置く。

建国記念日になる前の紀元節にある作者の思い。